

い わ み ぎ ん ざ ん

石見銀山

遺跡総合調査概報(2)

平成14年(2002)3月

温泉津町教育委員会
仁摩町教育委員会
大田市教育委員会
島根県教育委員会

色あざやかな陶磁器

宮ノ前地区では江戸時代初めの生活跡から、カラフルで、さまざまな形の陶磁器が出土しました。黄、青、茶、白色などの釉薬が使われ、目を楽しませてくれます。

瀬戸美濃、織部、志野、備前、絵唐津、伊万里、焼塩壺など日本各地の焼物や、朝鮮半島や中国産の焼物、東南アジア(タイ)産の壺などが出土し、大阪や京都のような大消費地の様相と同じです。



タイ産の壺片



みやのまえ 宮ノ前地区

平成11年から調査が開始され、13年度は0区・7区・8区で約430m²の調査が実施されました。調査の結果、江戸時代の初めから現在までの遺構面が4～5面存在し、各面の建物跡・敷地割りがよく残り、その変遷が明らかになりました。特に江戸時代初めと推定される遺構面では、金属の加工工房と推定される建物跡が検出されるという大きな成果がありました。

江戸時代初めの建物は、そのほとんどが柱穴を使う掘立柱建物跡であることや、建物に付属する便所や井戸などの施設の構造が分かりました。

江戸時代の生活道具類も大量に出土しました。陶磁器には供膳具・仏飯具、灯火具などが、木製品には下駄・箸・櫛・椀・建築材などが、金属製品にはキセル・銭貨・小柄・鉄製の道具などがあります。

また最下層で古代の遺跡の一部が確認され、須恵器が出土しました。



調査風景



道跡と溝跡（敷石が、道の部分）



石積みの井戸跡



宮ノ前地区遺構配置図(17C前半)



製錬炉跡（径20cmほどで厚さ5cmの炭が堆積しています）



出土遺物（分銅やキセル・コウガイの他に硯や紅皿、人形の灯明具などが出土しています）

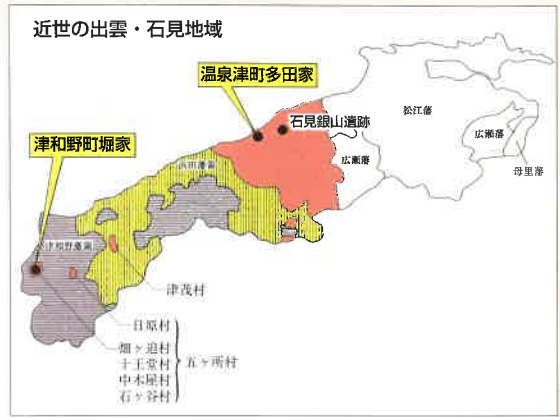


調査区全景（2区）

■ 文献調査

石見銀山の開発は、たくさんの銀を産出したというだけでなく、周辺の経済へ影響を与え、また銀山に人口が集中することによって消費・流通、文化などにも影響を及ぼしたと考えられています。古文書調査ではそれらを具体的に明らかにすることを目的としているので、調査の対象は広範囲になります。

今年度の県内古文書調査は、津和野町の堀家や温泉津町の多田家など、石見銀山に間接的に関わりのある場所で行いました。



堀家住宅

享保18年(1733)に焼失し、天明5年(1785)に再建されました。現在「堀庭園」として一般公開されています。

● 津和野町堀家調査

堀家は現在、一般公開されている「堀庭園」として知られています。徳川家康が慶長5年(1600)に石見国(現在の石見地方)を掌中に収め、その後元和3年(1617)に津和野藩が成立しましたが、日原町・鹿足郡畑ヶ迫村など5ヶ村にまたがる笹ヶ谷鉱山は銀山御料として幕府の支配下に置かれました。

笹ヶ谷鉱山は銅山師13人によって経営されましたが、やがて明治時代には堀家が経営を引継いだので、鉱山関連の古文書が堀家に遺っています。家屋が享保18年(1733)に焼失したため残っている古文書はそれ以降のものがほとんどですが、鉱山経営の実態を探る格好の史料といえるでしょう。



マイクロカメラでの撮影風景。マイクロフィルムはロール状になっていて、500~600カットの写真が撮れるので古文書撮影に適しています。

● 温泉津町多田家調査

温泉津町の温泉津港は、江戸時代には北前船の寄港地であり、銀山への物資はここから水揚げされました。

客船を扱う回船問屋は十数軒あったようですが、多田家もそのうちの一軒で、屋号を油屋といいます。

温泉津に入荷される物資には水上役(通関税)がかけられましたが、その品目と数量などを報告した史料などもあり、これらの史料から温泉津や銀山でどのような物資が消費されたかが分かります。



現在の温泉津港。温泉津町は港町、温泉町として16世紀頃から栄えていました。

● 歴史文献のデータベース化

これまで島根県内だけでなく、県外の鉱山や中国・朝鮮・ヨーロッパの「銀」関係史料など広範囲に調査を行ってきました。これまで収集した膨大なデータは「石見銀山歴史文献検索システム」として、データベース化を準備中です。史料の年代や所在、翻訳や読み下し文などの情報をパソコン画面上で見ることができ、見たい史料を瞬時に検索できる便利なシステムです。



科学調査

●科学的分析の実施

発掘調査などで得られた土や鉱石などの資料をさまざまな科学的手法を用いて分析し、銀山の技術の解明に当たります。



分析試料のサンプリング

科学調査では特に発掘調査との連携が大切です。サンプリングは科学調査の担当者も立ち会い、調査状況などを確認し合います。

非破壊的分析

発掘調査で出土する貴重な資料を、奈良文化財研究所の分析装置を用いて壊さずに分析します。昨年度出土谷地区から出土した灰吹銀の分析状況。



●三次元計測の実施

於紅ヶ谷地区ではレーザー光線を使った三次元計測を行いました。遺構の細部から空間的な広がりまで立体的に表現できます。



三次元計測の作業風景

発掘調査した範囲に加え、周囲の地形の様子も合わせて計測しました。



科学調査研究会の開催

今年度は石見銀山と関わりの深い、佐渡金山のある新潟県相川町で行い、地元の人たちと交流することができました。また、佐渡奉行所跡や出土遺物の見学、島内の金銀山跡を視察し、石見銀山との比較を行いました。



佐渡奉行所跡の見学

石見銀山では見られない、細長い炉跡や真ん中に仕切りのある炉跡が発見されています。



島内に残る鉱山跡の視察

地元の方の御協力で、相川金山をはじめ島内にある金銀山跡をつぶさに見学できました。



三次元データの点群画像

おびただしい数の測点で構成されています。あらゆる角度から画面を見ることができます。

竹田地区

昨年度、科学調査により灰吹炉の可能性が指摘された方形炉跡周辺の状況確認（Ⅰ区）と、新たな平坦地のトレンチ調査（Ⅲ区）を実施しました。

Ⅰ区の遺構面は平坦地の端（北側）では4面確認されました。厚さ数cmの盛土をしたのち、きれいな粘土を貼るなどしています。第3遺構面からも2つの方形炉跡を検出しました。

トレンチ調査では17世紀中頃までの遺物が出土しており、竹田地区で確認されている時期と同じ時期でありました。



Ⅰ区第2遺構面から検出された鐘型分銅。採掘・選鉱・製錬が一貫して行われている場所で、何らかの計量も行われていたと考えられます。（重さ1.1g）



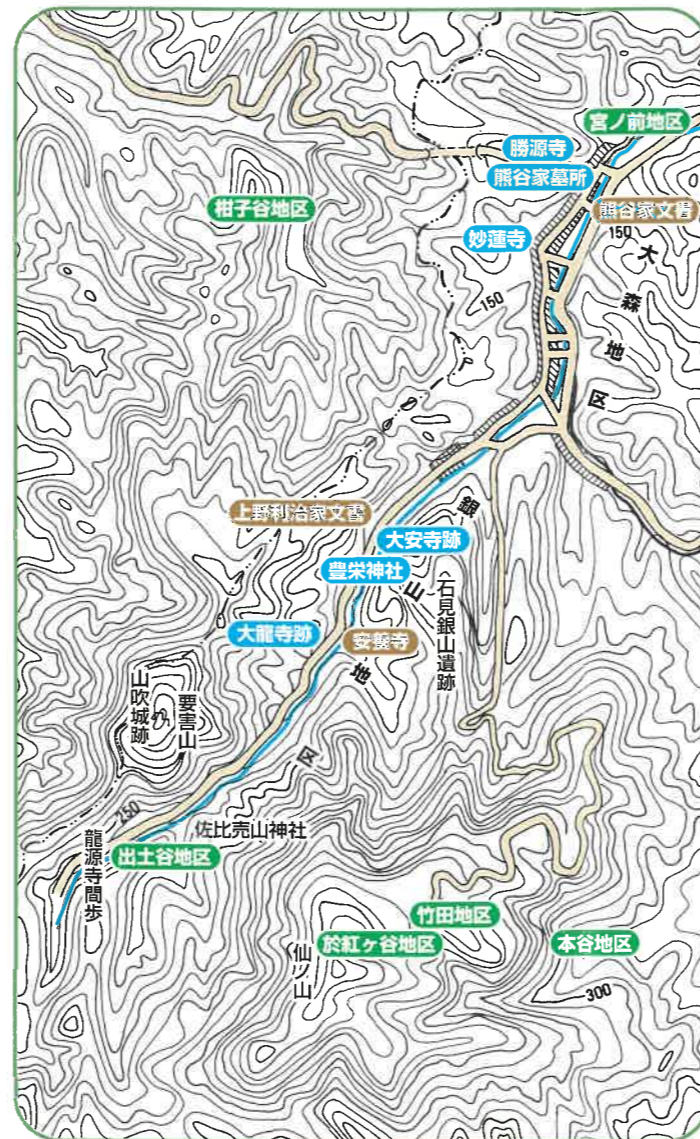
Ⅰ区第3遺構面で確認された方形炉跡。黄色粘土で長方形に成形された内部に、黒色や灰色の土が入っていました。



Ⅲ区の調査風景。Ⅲ区からも陶磁器と共にカラミ、羽口など製錬関連遺物が出土しています。



銀鉱石から銀を取り出すための添加物（右が鉛片、左が酸化マンガングル）。江戸時代前半の技術が、発掘調査と科学調査により少しずつ判明し始めています。



本谷地区

本谷遊歩道設置工事に先立ち、遺構確認のため5ヵ所で部分調査をしました。



於紅ヶ谷地区

昨年度の調査に続いて平坦面と建物跡、問歩前の調査を行いました。建物跡は、17世紀初め頃に造られたことや、それ以前の遺構が残っていること等が明らかになりました。

建物跡の南西部分には、50cm大の石が並べてある状態で検出されました。土留めの目的と思われる。他に露頭掘りの跡等を検出しました。



土留め状の石列



下層の加工された岩盤の様子



露頭掘りの跡（工具の跡が残っていました）

出土谷地区

18世紀代から19世紀にかけての製錬を行った建物跡と、道を挟んだ平坦面の調査を行いました。建物に伴う炉跡などの配置や、建物と問歩の関係が明らかになりつつあります。



建物跡と調査前の問歩



溝と道の様子（溝には石垣が築かれています）

柑子谷地区詳細分布調査



分布調査に入る前、柑子谷地区は山林全体が荒廃し、雑木や竹が生い茂り全く見通しのきかない状況でした。そこで、残存する石垣やテラスの周辺をきれいに伐採しました。



伐採によって、石垣の全体がきれいに姿を現しました。写真は柑子谷地区の牛の首谷と呼ばれる永久鉱山の施設が集中した中心部分で、明治時代の鉱夫長屋が炭小屋などがあった場所と思われます。

石造物調査

石造物調査では毎年、分布調査と悉皆調査を行っています。

分布調査は昆布山谷、大谷、栃畑谷で行い、32カ所で約2,700基の石造物を確認しました。古い銘文は極楽寺(1593年)、長楽寺跡(1590年)、妙本寺上墓地(1576年)、徳善寺跡(1582年)などがありました。

悉皆調査は勝源寺、妙蓮寺、大安寺跡の奉行・代官墓所や安養寺、大龍寺跡、豊栄神社を対象に行いました。昨年度と今年度で大森町にある奉行・代官墓所の石造物調査を終了しました。

安養寺では約300基を調査し、記載されている銘文から18世紀後半から19世紀前半に多くの墓標が造られていること、丘陵を加工し、平坦を造り、その平坦面に数基の石造物がまとまっていることがわかりました。



大安寺跡(浄土宗)

大型の組合せ五輪塔と大久保長安公碑だけでなく、周辺にある墓碑も調査しました。復元すると高さ2 m以上の大型の組合せ宝篋印塔がありました。



勝源寺(浄土宗)

竹村丹後守、森八左衛門、前澤藤十郎、関忠太夫、鈴木八右衛門、会田伊右衛門の奉行・代官及びその家族の墓塔や、奉行等により寄進された灯籠を調査しました。



大龍寺跡(臨済宗)

天正10年(1582)銘開山和尚の無縫塔、寛政2年(1790)銘の無縫塔などの実測や組合せ宝篋印塔を納めたと考えられる石廟の図上復元などを行いました。



安養寺(浄土真宗)

実測図作成、写真撮影、採拓、銘文の解明など立正大学の池上悟助教授や院生・学生などに依頼して調査しました。古いものとしては元和4年(1618)銘の一石宝篋印塔がありますが、多くは近世後半の角塔です。



妙蓮寺(日蓮宗)

代官阿久沢修理墓所及び周辺の灯籠を調査しました。墓碑の廻りには玉垣が巡っています。

豊栄神社

石工名の確認などを目的に寄進灯籠を中心に調査しました。豊栄神社は幕末の長州戦争時、長州藩士により寄進された石造物があり、大森に進駐した多くの人名が記載されています。



町並み保存地区の調査

重要伝統的建造物群（町並み）保存地区に選定されている大森銀山地区では、保存修理する建物の調査や古文書などの資料調査が行われています。

●重文旧熊谷家住宅の保存活用と調査

地区内で最大規模を誇る旧熊谷家住宅（重要文化財）では、保存修理に先だって熊谷家の暮らしの実像を解き明かすための家財調査や、古文書調査、発掘調査、石造物調査が実施されました。



保存活用検討委員会の開催（旧熊谷家住宅奥乃間にて）

家財・古文書調査の成果を活かすため、調査の専門家も参加しています。

●安養寺本堂の修理と調査

今年度、地区内では住宅・寺院を合わせ9件の建物修理を行いました。

安養寺（浄土真宗本願寺派）は大永3年（1523）の創建とされ、もと仙ノ山にあったと伝えられています。

現在の本堂は、明治14年（1881）の記録や、修理の過程で見つかった痕跡から、寛政末期（1800年前後）の建立と推定されます。



明治29年ごろの古写真

左下が安養寺、中央が清水谷、右の山裾には藤田組が経営していた製錬所が写っています。



修理前の本堂正面

傾きやゆがみが激しいため、今回は土台・軸部などの調整や、瓦の葺き替えなど、半解体修理を行うことになりました。



搬出作業から始まった家財調査

部屋別にラベルや荷札を一品ずつ貼り付けて運び出します。9日間、延べ150人の大がかりな作業となりました。



敷地内の発掘調査

古絵図に見える建物（離れ、土蔵）の遺構を確認する試掘調査です。敷地に隣接してかつての御銀蔵小路も確認されました。



寛政9年（1797）の刻書銘

須弥壇後ろの柱で見つかりました。柱を寄進した人の名前が刻まれています。